

近世後期の祇園清水あたり における寺院座敷の構成

出村 嘉史¹・大住 由布子²・川崎 雅史³・樋口 忠彦⁴

¹正会員 博 (工) 岐阜大学工学部社会基盤工学科 (〒501-1193 岐阜市柳戸1-1,
E-mail:demu@gifu-u.ac.jp)

²非会員 工修 株式会社日本政策投資銀行九州支店 (〒810-0001 福岡市天神2-12-1)

³正会員 京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1)

⁴正会員 広島工業大学環境学部地球環境学科 (〒731-5193 広島市佐伯区三宅2-1-1)

本研究は、文化の爛熟期であった近世後期における京都祇園清水あたり（現在の八坂神社・円山公園周辺から清水寺にかけての一連の領域）を対象にして、遊興的空間として利用された寺院の座敷に着目し、どのような構成によってこの空間が成り立っていたのかを明らかにするものである。特に新しく見出された史料『寺地画図』により境内における配置の詳細と各塔頭内の配置と間取りが明らかになったことから、主要な視点場としてのそれぞれの建築物がどのような方向へ視線を投げかけていたのが把握できるようになった。また、現実に近い空間構成が把握されることから、描かれた像の成り立ちへの考察もできるようになった。

キーワード: 京都東山, 近世後期, 寺地画図, 視点場の構成, 座敷

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

2004年に制定された景観法によって謳われた「潤いのある豊かな生活環境の創造及び個人的で活力ある地域社会の実現」という目標は、今や全国各地へ伝わり、それぞれの自治体が慎重ながらそのための試行錯誤を進めている段階であるように見受けられる。場所の風土性によって良好な景観のあり方を求める必然性が、すなわち景域に蓄積された文化的な価値を消費財として消耗してしまうのではなく、常に文化を萌芽させて新鮮さを持続する場所の創造の重要性が、一般に理解されつつある。すなわち現在の課題は、そのような場所の創造の総体として求むべく良質の景域は、どのようなものとするべきか、その構造的原理を見出すことにある。

景域の形成においては、主体が経験する現象としての側面が大きい。散策者がある領域をひとまとまりの景域であると捉える時、その領域における散策の過程と、何らかの愉しみや休息の拠点、つまり身体の在り処が、景域の構造的骨格になると考えられる。筆者らは、祇園清水辺り（現在の八坂神社・円山公園周辺から清水寺にかけての一連の領域）を対象にして、近世中期に一人の主体として本居宣長が記し残した景域像がそのように成り

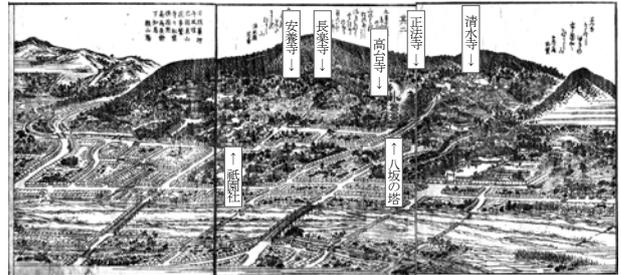


図-1 『花洛名勝図会』の東山全図の中に見る対象地

立っていたことを既に示している¹⁾。

本論では、このうち愉しみや休息の拠点となった場所のあり方に着目したい。そのため、名所図会を用いた庶民の物見遊山が盛んに行われ文化の爛熟期であった近世後期における同じ領域を対象にして、遊興的空間として利用された寺院の座敷に着目し、最近見出された資料から読み解き、どのような空間の構成によってそういった場所が成り立っていたのかを明らかにする。

同領域が内包する円山時宗寺院の空間構成については、既に研究成果があり²⁾、傾斜地形と建築・庭園の配置の関係について、主に名所図会に描かれた眺望に関する情報から整理されている。ただし同研究では、名所図絵に描かれなかった詳細の情報に関して、多くの推量を容れており、それ故に座敷の規模に及ぶ詳細な分析に至って

はない。本研究は、新しく見出された有力な資料も用いているため、その実態、例えば建築による視点場の働きなどを、さらに明確に描き出すことができる。

また、対象領域に関して、境内におけるアクティビティに注目した研究³⁾は幾つかあるが、本研究のように、近世の当該寺院の座敷について、その視覚性を確認しようとした研究は、これまでにない。

(2) 使用した主な資料

本研究では、主に二種の史料を用いている。一つは、名所図会に描かれた絵図であり、もう一つは境内の配置を知るための有力な史料『寺地画図』⁴⁾である。

用いた名所図会は、既往研究においても多用していた『都林泉名勝図会』⁵⁾ (1799) と『花洛名勝図会』⁶⁾ (1854) である。『都林泉名勝図会』は、近世中期に先駆けとして発行された『都名所図会』⁷⁾ (1799) と同様の鳥瞰表現を基本とした名所図会であり、名所の特徴のある部分の相対的配置はある程度信頼できる。さらに『都林泉名勝図会』は、庭園などの林泉を専門的に扱っているために『都名所図会』のように網羅的に名所を紹介するものではなく、名のある庭を持つ社寺境内の一部（主に塔頭）や、庭園的に捉えられる限界が掲載されている。中でも円山時宗寺院に関しては、庭園を持つ塔頭が一つ一つ丁寧に紹介され、庭園を含めた塔頭内部の景観や、さらにはその中で行われた遊興の行為などが細かく描かれている。ただし、描かれた地形を現在の地形と比較すると、地形褶曲の相対的關係性はほぼ一致するが、場所によっては180°以上にわたる視界を一画面に描いている場合には角度の操作が見られ、実際以上に広い空間のように描かれている。

『花洛名勝図会』は、さらに詳細が描き込まれ、『都名所図会』では無頓着であったスケール感に対する執着が見られる。『都名所図会』においては1枚に収められていた境内の絵が、複数枚にわたって描かれている例もみられる。特に、安養寺については正面からの絵と、地形的に特徴のある参道の一部をクローズアップした絵が描かれており、描かれた地形は現在に遺された地形とよく適合し、これに基づく庭園・建築の配置そのものは、信頼できる情報であると考えられる。

『社寺画図』は、京都府立総合資料館所蔵の京都府庁文書の中に収録されており、明治3年(1870)に京都府の指示により管轄下にあった各寺院が作成した図面であり、上知前の各塔頭内の配置が、間取りまで詳細に記されたものである(図-2)。近世後期の空間構成は、明治4年以降実施された上知以前にはほぼ保たれているものと考え、この資料を用いた。これにより、敷地境界線と建築の関係や、部屋の規模(畳数)、縁の配置などを明

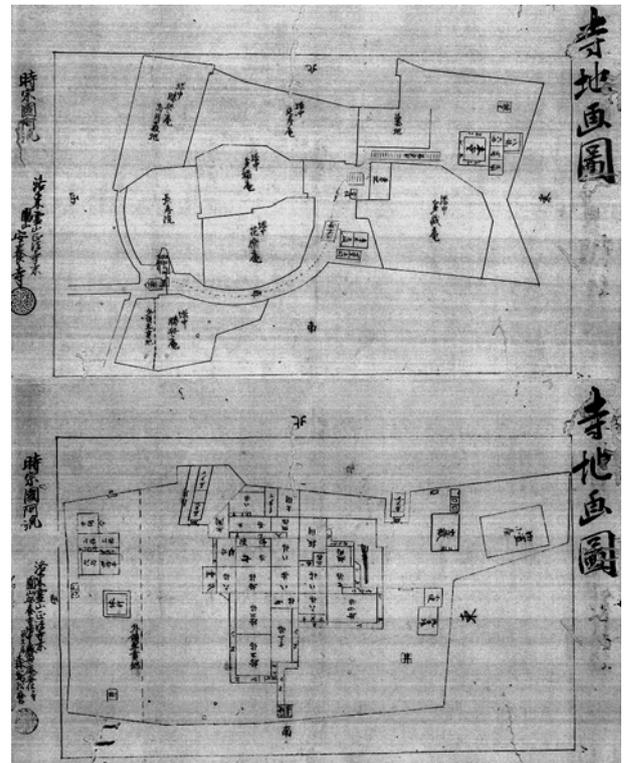


図-2 『社寺画図』の例：上は安養寺の敷地区画、下はそのうち正阿弥(勝興庵)の配置図。

確に読みとることができる。これらを地形情報と合わせれば、境内における視点場と眺望の關係が把握される。

また、以上の史料によって明らかになる空間において、どのようなアクティビティが可能であったのかを、『史料 京都見聞記』⁸⁾によって確認する。

2. 対象地概要

東山三十六峰のうちの円山から清水山にかけての山裾に対象領域は位置し、南東から北西方向に流れる二本の谷筋によってその山体が区切られている。対象領域には、八坂神社、法観寺、高台寺、清水寺など多くの有名社寺が存在しており、中世から参詣人を対象とした商業の町が発展した。近世に入ると幕府による社寺の復興や移転が行われ、それを契機に各社寺の周囲に清水・法観寺・高台寺の各門前町が確立した。さらに近世中期には、対象地域内で初期の門前町を繋ぐように新町の開発が相次いだ。開発後の土地は茶屋や旅籠屋や店屋として利用され、近世後期には参詣道沿い一帯を参詣客が行き交う様になった。

その頃の領域における敷地の構成は、「社寺境内外区別取調図」⁹⁾や18世紀に出版された名所図会などの絵図資料や案内記¹⁰⁾、各種古地図¹¹⁾を基に、近世中期のものとして既往研究¹²⁾で作成された図を、各種文献¹³⁾により

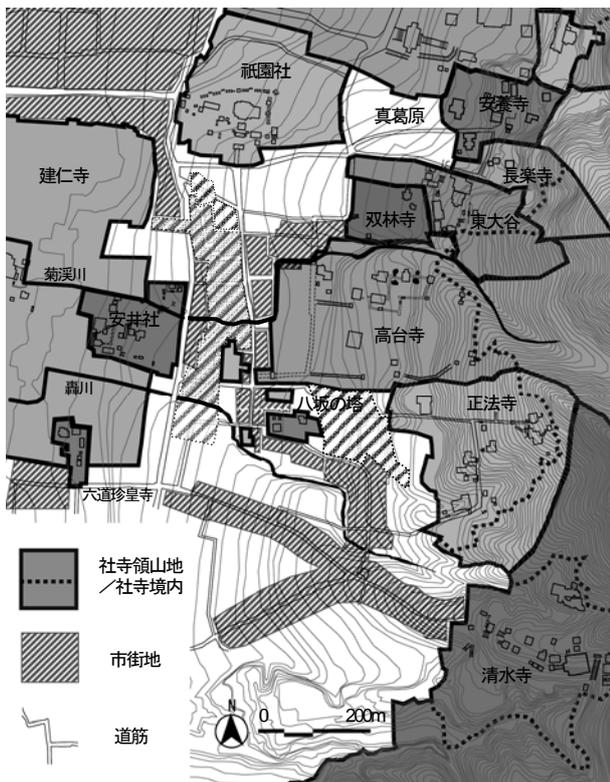


図-3 19世紀中葉の社寺と門前における清水祇園界隈の敷地と道の構成（筆者作成）

町域の変遷を把握して修正した図-3により把握される。清水寺、正法寺、安養寺、双林寺など、特徴のある座敷が確認される寺院敷地は、概ね山辺の上部にあり、等高線の間隔（図中2m間隔）も密になっている。

3. 清水寺における座敷の構成

清水寺において、建造物の多くは音羽山の尾根上に立地している。その尾根は轟川・音羽川の二本の河川に挟まれているが、音羽川は奥院下の音羽滝に源を発する。

浮瀬と呼ばれた滝下の茶店は、滝の南に位置する清水寺の塔頭群であったが、時宗寺院の塔頭とは異なり、一般に茶店と認識されるような小規模なものであった。その中で、舞台や滝に面して配置されていた北部の二塔頭（南蔵院・慶養庵）は、部屋の周囲に縁が設けてあり、滝や舞台や奥の院を見渡すことができた（図-4, 5）。見聞記には「音羽の滝にいたり、茶店にて素麺をくらひしに、（中略）音羽の清水にひたせしなれば、尤ともあちわひよくそ思わる」¹⁴等と記されており、滝下の茶店での飲食には音羽の滝水が欠かせない存在であったことがわかる。また奥院は本堂南東部の切り立った崖上に位置し、「洛中洛外一目にみせし景色」と同時に、崖下に配置された音羽滝が眺められたという¹⁵。

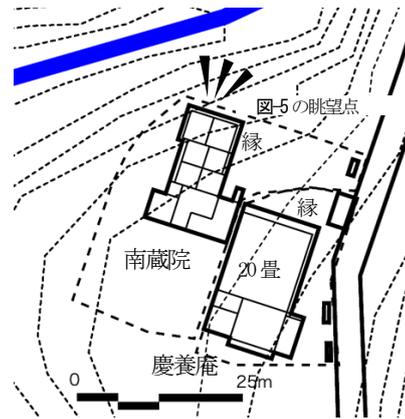


図-4 浮瀬北部の塔頭（『寺地画図』を元に筆者作成）

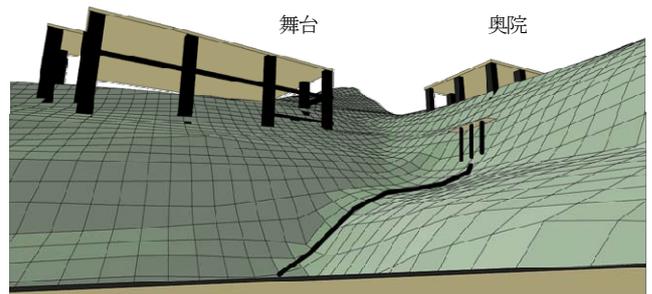


図-5 地形モデルで南蔵院からの眺望を確認（筆者作成）



図-6 歌川広重『京都名所之内』（1834頃）

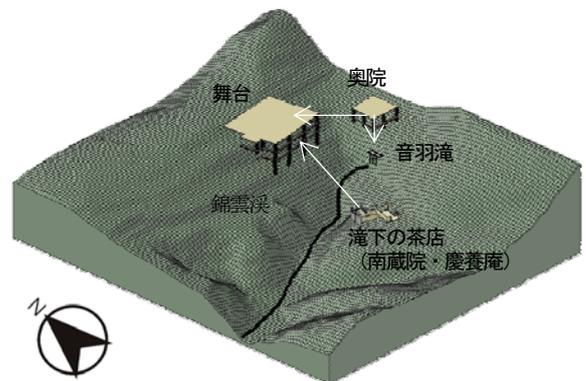


図-7 奥院・滝下茶店の眺望と配置関係（筆者作成）

これらの塔頭と舞台との間の谷は錦雲溪と呼ばれ、紅葉の名所として名高かった¹⁶。また舞台下の崖には多数の桜樹が植えられており、春には大勢の花見客が舞台か

らの絶景を愛でたが、近世後期に歌川広重の「京都名所之内」に描かれた風景(図-6)は、構図からみて南蔵院から桜の中に浮かび上がる舞台の姿を描いたものだろう。

このような、滝と舞台を中心とした店の配置(図-7)により、他の寺院では味わうことのできない、これらの茶店固有の体験が可能となっていた。

4. 時宗寺院における遊興空間

安養寺・双林寺・正法寺の三寺院は元々天台宗の寺院であったが、中世に国阿上人に中興された際に時宗となった。時宗は鎌倉時代後期に興った浄土教の位置宗派であり、遊行により広められた教えは一般民衆に広く受け入れられることとなる¹⁷⁾。踊り念仏という布教形式をとった時衆にとって、布教のためには尼が欠かせない存在であった¹⁸⁾。念仏踊りは次第に音楽舞踊として発達し、時衆の尼達の中には、時代を下るにつれ蓄髪美装の女芸人となった者もいたとい¹⁹⁾、時衆は対象地の遊興にも何らかの影響を与えていたのではないかと推察される。近世に入ると、これらの三寺院は宗教施設としてよりも席貸しとして有名になる。寺院の塔頭には肉食妻帯の僧が居住し、訪れる人々に料理を振舞った。

近世後期の時宗寺院は書画・狂言・歌会・舞会、立花・生花会・点茶などの催しが行われていたことがわかっている。また近世後期の東山における時宗寺院は庶民の宴会の場として有名であった。塔頭で行われる催しでは宴を伴うことも多く、宴には下河原から芸妓を呼ぶことが多かった。

(1) 安養寺

安養寺は山辺の傾斜地に立地しており、斜面を活かした変化に富む造園が為されていた。『寺地画図』を元に、既往研究において作成された平面図を修正したものが、図-8である。またそれぞれの塔頭について見れば、建物へのアプローチと内部空間は、来客用(ハレ)と、生活用(ケ)とに分離されていた。これは他の二寺院にも共通して言えることである。そのうち来客用スペースの方は、襖等で仕切られた大部屋で構成されており、部屋の周囲には縁が設けられていた。そのように高い位置に開放的な空間を設えることで、庭園や洛中への眺望を可能としていた(図-2, 9, 10)。

近世後期の東山における時宗寺院は庶民の宴会の場として有名であった。塔頭で行われる催しでは宴を伴うことが多かった。見聞記の記述からは、当時の人々には寺院というよりも寧ろ宴会のための店として認識されていたことが窺える。宴には、下河原から芸妓を呼ぶことも

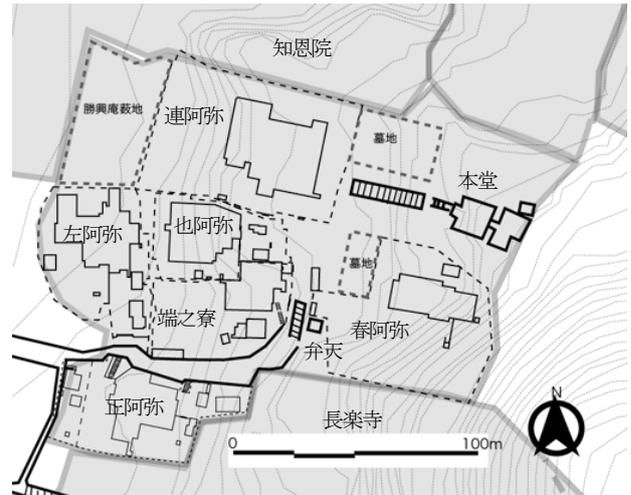


図-8 安養寺平面図(『寺地画図』を元に筆者作成)

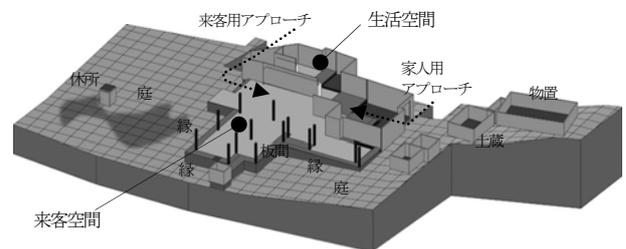


図-9 正阿弥の空間構成(『寺地画図』を元に筆者作成)

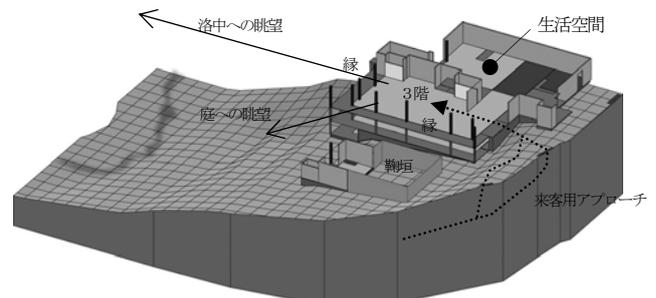


図-10 端之寮の空間構成(『寺地画図』を元に筆者作成)

多くあった。

安養寺の端之寮や多福庵では、図-10に見るような「鞠垣」が設けられ、鞠会が催されていた。鞠庭の広さは平均で約14m平方あり、ある程度以上の規模の庭でなければ設けることができない。その点安養寺の塔頭は十分なスペースを確保することができた。また鞠垣は約5mの高さがあったが、安養寺の塔頭には高樓となっているものや庭との高低差が大きいものも多く、屋内に居ながら鞠垣の中を覗くことができたため、飲食をしながらの観覧も可能であった。安養寺が鞠会の会場として選ばれた理由には、そのような地形的・建築的特性があるのではないかと考えられる。

(2) 双林寺

双林寺は対象地の寺院には珍しく、傾斜のなだらかな

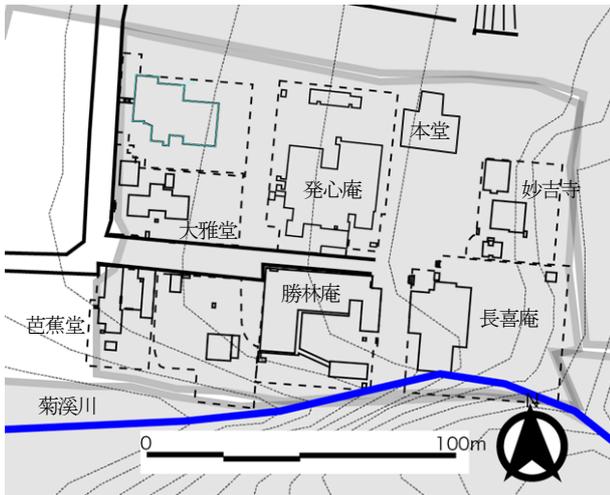


図-11 双林寺平面図（『社字画図』を元に筆者作成）

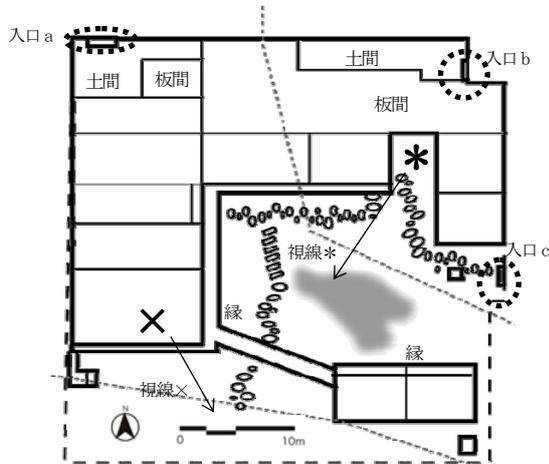


図-12 勝林庵平面図（『寺地画図』を元に筆者作成）

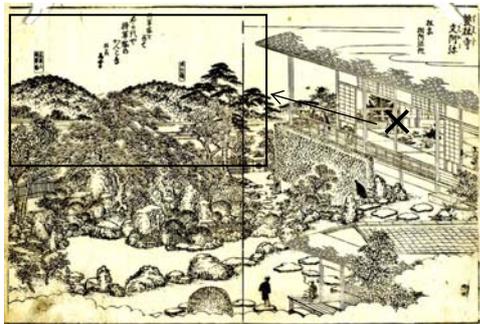


図-13 勝林庵庭園『都林泉名勝図会』

場所に立地していたが、変化に富む作庭がされていた²⁰⁾。

『寺地画図』を元に双林寺境内の配置は、図-11 のように把握される。現在は失われているこのような敷地区画が明らかになることで、各塔頭における建築配置と眺望の関係が明らかになる。

勝林庵（文阿弥）の敷地内の配置は、『寺地画図』を元に図-12 のように把握される。図中の入口 a は、『花洛名勝図会』に表門の装いで描かれていることから、これが来客者のアプローチと判断され、入口 b は生活動線、入口 c は貴人入口としての飾門と考えられる。



図-14 正法寺平面図（『寺地画図』を元に筆者作成）

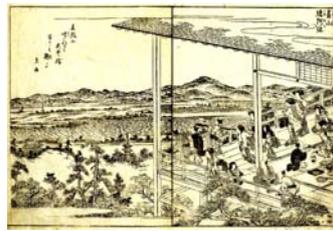


図-15 珠阿弥からの眺望（『都林泉名勝図会』）

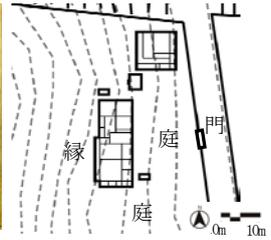


図-16 珠阿弥平面図（『寺地画図』を元に筆者作成）

図-13 に描かれた風景の解釈については、描かれた時差を考慮して、庭に突き出した離れが後に出来たものとするれば、図-12 中の視点場*から同等の構図が得られる。しかし、図-11 から判断すればこの視線では背景の山並みが得られない。そこで、この描かれた山並みは、突き出した建築内の視点場xからの像を嵌めこんで描いたと過程すれば、理解できる上に、図-13 がより臨場感を高めた画法であることに気が付く。そして同時に、この絵画において強調される視点場xを物理的に成立させるために、谷に向かって敷地内の微地形を造る工夫が把握できる。やはり眺望のよい視点場には縁が廻らされている。

その他、長喜庵では傾斜のある敷地の底部に建築を寄せて、東側の山並みへの眺望方向へ大きく縁を廻らせて開く建物の構成をしている。またここでは庭園に川を取り込み、地形の高所に祠を設けるなど、立体的な造形を行っている。芭蕉堂、大雅堂などは、平坦な敷地を塀や建築で囲い込んで、中の史跡が強調されていた。

(3) 正法寺・翠紅館

『寺地画図』を元にして、翠紅館を含んだ正法寺境内の平面構成は、図-14 のように把握される。正法寺の塔頭は急な斜面に立地しており、崖となっていた洛中側には庭園を配置していなかったが、珠阿弥の建物のように懸造りの建築を設えることでダイナミックな眺望の変化を体験することができた（図-15, 16）。また来客用スペースの周囲には縁が設けられ、庭や洛中を臨むことができたことが、『寺地画図』から把握された。

翠紅館（東光寺）はこれらの中で比較的緩やかな斜面上の配置されていたため、広い庭園を有していた。庭園に面しては建築に縁が廻らされており、さらに 20 畳以上の広間が建物西端に配置されていた。この広間の北端には広く板間が設けられていたが、これは舞台として用いられていたと思われる。全体的に建築物は敷地の東部の高台に位置し、広い庭園で退きを取って、より広い洛中への眺望を得ていたことが分かった。

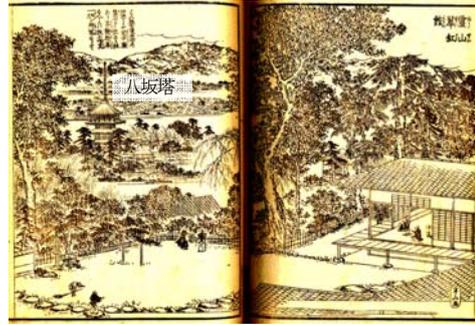


図-17 翠紅館（『花洛名勝図会』）

4. 結論

以上に近世後期の祇園清水あたりにおける寺院境内に見られた座敷について、今まで明らかにされていなかった実際の空間構成を、新たに見出された史料を元に明らかにした。すなわち、『寺地画図』による境内における配置の詳細と各塔頭内の配置と間取りが明らかになったことから、主要な視点場としてのそれぞれの建築物がどのような方向へ視線を投げかけていたのかが把握できるようになった。清水寺境内においては、音羽滝を囲んだ谷地形の中に、舞台・奥の院・茶店としての塔頭（座敷を持つ）がそれぞれ視線を交わしながら立体的に配置されていた。そして安養寺・双林寺・正法寺の時宗寺院においては、それぞれの地形に応じて、既往研究で推定された通りに眺望を求めており、諸文化活動の会場としての容量を保ちながら、求める眺望方向へ縁を張り出す構成が基本としてあったことが明らかになった。また、現実に近い空間構成が把握されたことから、描かれた像の成り立ちへの考察もできるようになった。

このような視点場としての座敷のあり方は、近代になって、一般営業する茶店・喫茶・旅館などの空間へ展開していくことは容易に推測でき、本成果は当該領域における景観史の重要な時期を描くことができたと言えるだろう。また、回遊性を持ち潤いのある魅力的な環境を求めるまちづくり活動が全国に広がる中で、そうした環境の拠点として重要な場所づくりのヒントにもなるだろう。

参考文献

- 1) 出村嘉史ら：本居宣長『在京日記』にみる行楽地としての東山景域の構成，土木学会論文集D，Vol. 63 no. 2，pp. 158-168，2007.
- 2) 出村嘉史ら：近世の京都円山時宗寺院における空間構成に関する研究，土木計画学研究・論文集，Vol. 18 no. 2，pp. 387-394，2001.
- 3) 「近世後期の京都における寺社境内の興行地化」（山近博義，人文地理，第43巻第5号，1991），「相見文庫蔵『新書画展観目録』翻刻と解題(上)」(田邊菜穂子，文献探究四十一号，2003)，「相見文庫蔵『新書画展観目録』翻刻と解題(下)」(田邊菜穂子，文献探究四十二号，2004)，「遊宴の場と能楽」(小林英一，藝能史研究，No. 135, 1996) など。



図-18 翠紅館の立地と地形

- 4) 京都府立資料館蔵：寺地画図，京都府庁文書。
- 5) 秋里籬島：都林泉名勝図会，吉野野為八，1799.
- 6) 晴翁木村明啓：花洛名勝図会，笹屋成兵衛，1864.
- 7) 秋里籬島：都名所図絵，書林吉野屋，1780.
- 8) 駒敏郎他：史料 京都見聞記 (1-3 巻)，法蔵館，1991.
- 9) 「社寺境内外区別取調図」(『京都府庁文書』京都府立総合資料館蔵)
- 10) 『都名所車』1714，『安永八年京都細見之図』1779，『都名所図会』1780，『都名所図会拾遺』1787，『京城勝覧』1784，『都林泉名勝図会』1799
- 11) 「地形図 京都・伏見」(大日本帝國陸地測量部，1891.10)，「京都市地図」(京都市参事会，1896)，「京都3千分1地形図」(都市計画京都地方委員会，1922-1929)，「元禄十四年実測図」1701，「京都明細大絵図」1714-1721，「増撰再版京大絵図」1741，『京町鑑』1762，「安永八年京都細見之図」1779，など。
- 12) 出村嘉史ら，2007.
- 13) 『京都市の地名』(平凡社，1979)，『清水寺史 第二巻 通史(二)』(清水寺史編纂委員会，1997.5)，『史料 京都の歴史 第10巻 東山区』(平凡社，1987)
- 14) 『史料 京都見聞記 第三巻 紀行III』p. 306
- 15) 「音羽山清水寺に詣るに，(中略) 舞台は今普請中にて，奥の院より音羽の滝を見をろし，茶店に憩ふ(綺語文草，1850)。」(駒敏郎他：史料 京都見聞記 第三巻 紀行III，法蔵館，1991，p. 256.)
- 16) 『京都市の地名』p. 249
- 17) 大橋俊雄：『時宗の成立と展開』p. 30 (吉川弘文館，1983.6)
- 18) 今井雅清著：『一遍- 放浪する時衆の祖』pp. 150-161 (三省堂，1997.11)
- 19) 高野修著：『時宗教団史【時衆の歴史と文化】』pp. 168-170 (岩田書院，2003.3)
- 20) 出村嘉史ら，2001.